周利槃特と茗荷について

令和二年七月二十二日　於加茂法話会

周梨槃特（しゅり・はんどく）・・・増一阿含經・釋氏要覧に箒（ほうき）お釈迦様は、周利槃特彼に一枚の布を与え、「塵を除く、垢を除く」と唱えさせ、精舎を払浄せしめた。彼はそれにより、落とすべき汚れとは、貪（よくばり）、瞋（いかり）、痴（ぐち）という心の汚れだと悟り、すべての煩悩を滅して、阿羅漢果を得たとされる。

茗荷（みょうが）茗…ぼうっとする。荷…になう。肩の上に物をのせてかつぐ。茗荷の名前の元になったお坊さんは、周利槃特（しゅりはんどく）、托鉢に出かけても、お釈迦様の弟子として認められず、乞食坊主扱いをされ、お布施を貰うことが出来ない。お釈迦様はこれを憐れみ、「周利槃特」と書いたのぼりをこしらえて「明日からこれを背負って托鉢に行きなさい。もし名前をたずねられたら、これでございますと、のぼりを指差しなさい。」といわれた。次の日から托鉢の時にのぼりを背負っていくと、人々はお釈迦様の書かれたのぼりをありがたがり、たいそうなお布施をいただくことができるようになったそうである。

周利槃特は、雨の日も、風の日も、暑い日も、寒い日も、毎日「ごみを払おう、ちりを除こう」と唱えながら掃除をし続けた。やがて「おろか者の周利槃特」と呼ぶ人はいなくなり、周梨槃特が亡くなり、彼のお墓にあまり見たこともない草が生えてきた。彼が自分の名を背に荷（にな）ってずっと努力し続けたことから、この草は「茗荷（みょうが）」と名づけられたということである。

周利槃特は、夏の暑い日に、汗を拭った、チリやホコリは、あると思っている所ばかりにあるのではなく、「こんな所にあるものか」と思っている所に意外にあるものだと知り、「こころのチリやホコリは、いかり、よくばり、おろかさである」清浄な布が汚れてしまう所に無常なる事を悟った。

周利槃特は十六羅漢と呼ばれる、お釈迦さまのお弟子の中でも特に優れた弟子の一人として、「義持第一の周利槃特尊者」と呼ばれるようになりました。

庭を掃除する・ホコリを払う事が佛道修行になるの？・・・正法眼藏「洗面」・「洗淨」巻に

顔を洗う「洗面」の作法を日本に最初に伝えたのは道元禅師です。「洗面の巻」では、洗面と歯磨きについて示されています。『内外倶浄』・・・その時、その世界、わが身心もことごとく、清浄である。内の外も清浄、このところ以外に佛道はないのである。お釈迦様は、菩提樹の下で悟りを開かれる前に、袈裟を洗い、身心を洗い清めた、それは、三世諸佛の作法である。

修行道場では、（手巾・しゅきん）という長い布を首に掛けて両脇にまわして襷掛けのようにして衣の袖が濡れないようにし、桶にお湯を汲み、額から両方の眉毛・両目・鼻の孔・耳の中・頭や頬まで、脂や垢をこすって洗うことと示されています。楊枝を用いた歯磨きに使ったのは、柳の一種の枝です。

正壽寺住職呉定明合掌